

旅順の“剣山記念塔”と戦前期徳島の地域社会 Monument to the Battle of *Kenzan* in *Lüshun* and Society in Pre-war Tokushima

荒武 達朗

はじめに

【補記】本稿は荒武達朗「旅順の東、“剣山”：徳島県人の日露戦争」『平成31年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書 異文化に照らし出された四国：外国語文献と異文化的視点を持つ関連文献の調査から』総合科学部、2020年3月刊行を改稿し記述を増補したものである⁽¹⁾。

1894年～1895年の日清戦争は日本の朝鮮半島での影響力拡大、澎湖諸島・台湾という初の海外植民地の獲得、ならびに対アジア観変容の契機として理解されている。続く1904年～1905年の日露戦争における戦死傷者と費えた軍費は日清戦争の規模を大きく上回った。直接・間接的に列強の利害関係と結びついていた為、国際社会も日本とロシアの対立に注視した。ロシアに辛うじて勝利した日本は名実ともに帝国主義諸国の一角へと参入した。20世紀前半の日本の画期となった日露戦争は重要な研究テーマであるだけでなく、その戦いの劇的な展開も相まって現在においても人びとの興味関心を集めており、様々な媒体、ジャンルに亘り数多くの作品が生み出されている。

日清戦争の政治・経済・外交上の意義は大きくとも、その当時の地域社会に暮らす人びとにとっての影響は比較的小さかった。無論、これは比較・程度の問題であり徴兵と出征により戦争を意識せざるを得なかったことは事実だが、この10年後の日露戦争は日清戦争よりも遙かに強いインパクトをもたらした。10年前に比べ新聞メディアは大きく成長し情報の伝達速度・分量ともに向上した。早い場合では2、3日後に現地の状況がニュースとして地域に伝播した。郷里の兵士の手紙、様々な論者の言説が毎日の紙面に掲載され、人びとの感情を動かし世論を形成した。そして兵士の活躍を伝える文面の陰で、戦死者の追悼と慰霊の行事を伝える記事もまた珍しいことではなくなった。特に動員された師団を擁する地域の人びとにとって戦争は否応なく日々意識せざるを得ない重要な事項となった。日本各地の地域社会は日露戦争によって戦争や軍隊を身近な日常として受容するようになったのである。

この地域社会と戦争・軍隊というテーマは戦前期日本に関する研究において一つの重要な分野を形作っているものの⁽²⁾、戦争全体を俯瞰的に検討する動向の隆盛に比べれば相対的に手薄な領域であった。それでも例えば近年では松尾正人氏や小幡尚氏が個別の地域社会の視点から

日露戦争を題材とする論考を著している。松尾氏は旧東京都北多摩郡を対象として、地方文書に含まれる書簡などから読み取れる情報をもとに日露戦争の推移と地域社会が受けた影響を論じた⁽³⁾。小幡氏は高知県内の幾つかの地域を題材に戦争と地域社会という問題について研究を進めている。その近作では旧高知県安芸郡中山村において人びとが帰還兵士・戦没者にどのように相對したかを論じ、日露戦争が地域社会の歴史の中で持つ意味について考察した⁽⁴⁾。このような「人びとが日常を生きる地域社会と戦争」という微視的な分析視角は、当時の人びとの日常という視点から日本が対外進出を推し進めていく内在的原因を解明するという問題意識を胎んでおり重要な意義がある。

本稿もまた上述の動向を踏まえ、地域の人びとが見た日露戦争の戦局、並びに戦後に意識変容を考察することを目的とする。分析視角としてはかつて中国旅順の東方にあり、現在「劍山（けんざん）碑」としられる一枚の石碑（当時は「劍山記念塔」と呼称）を中心に議論を進める。具体的にはこの劍山の由来から説き起こし、当時の人びとがこれに仮託した意図、そして日露戦後特に昭和初期における記憶の再生と称揚について述べる。使用資料は当時徳島で刊行されていた『徳島日日新報』『徳島毎日新聞』という新聞を中心とする。新聞資料はほぼリアルタイムで情報を配信しているため、その当時の世相を知る上で有効な資料と考えられる。

I 日露開戦と劍山の命名

四国を管区とする第11師団は日清戦争後の1898年12月1日善通寺に置かれた。各県1聯隊と称されるようにもともとあった丸亀第12聯隊、松山第22聯隊に加え、徳島第43聯隊、高知第44聯隊が新たに編成された。なお徳島県人が多く入営する歩兵第43聯隊はこの時点では聯隊本部を善通寺に置いている。さて日露戦争は1904年2月6日に国交断絶、10日に宣戦布告がなされたが、実質上の戦端はそれより先に開かれていた。第11師団には4月19日に動員令が下り、5月1日に動員業務が完了した。5月22日に詫間湾より出航、5月28日に遼東半島の大連近くの大連湾に上陸した。第11師団はこの後6月6日に編成される第3軍の下で旅順要塞攻略戦に参加し、要塞東側正面の堡壘群の攻撃を担当した。8月19日～24日の第1次旅順総攻撃と10月26日～30日の第2次総攻撃は失敗するも、11月26日より始まる第3次総攻撃において各要地の奪取に成功し、翌1905年1月1日に旅順は陥落した。第11師団は攻略戦の前段階、そして小孤山や大孤山という丘陵、東鶏冠山堡壘や一戸堡壘、望台砲台の攻撃においては多くの戦死傷者を出している。その後第3軍は北上を開始、2月から3月にかけての奉天会戦に参加した。

徳島各地の寺院の墓地を訪ねれば、先端が尖った方錐形の墓石を目にすることがある。これは近代日本が経験した戦争において亡くなった軍人の墓である。彼ら兵士の墓碑銘を見るに、その主がシベリア出兵、日中戦争、太平洋戦争とそれぞれの戦いで命を落としたことが看取される。1937年以降の墓石は多いが、これは中国の戦場での戦死者が増加したことによる。さらに1941年以降は太平洋地域、東南アジアそして海上輸送途上で亡くなった兵士の墓が過半を占める。このように1937年以降に戦死者の弔いは地域社会の日常となった。そして様々な語り

伝えるように 1944 年の末には戦場そのものが空襲・艦砲射撃という形で日本本土に押し寄せた。

これより先、日露戦争の戦死者の墓石は全体から見れば極少数である。その命を落とした地点として東鶏冠山、望台や一戸、ならびに第 11 師団が旅順後略後に北上しロシア軍との戦闘を展開した清河城、馬群丹など遼東半島各地の地名が刻まれる。それは当時の人びとにとってその場所は自分の親族や友人、地域社会の知人たちが最期を迎えたところであった。徳島市内の A 寺の墓所のある墓石には次のように記される。なおスラッシュは改行を表し、旧字体は適宜常用漢字に改めた。また個人情報に属するため人名は○字にて代替する。(以下同じ)

「明治三十七年十一月廿六日／清国盛京省一戸於堡壘突撃名誉戦死ス／第十一師団陸軍歩兵第四十三聯隊／第二中隊勲八等／上等兵○○○○○」

また B 寺の墓所の墓石には、

「陸軍歩兵上等兵○○○○／明治三十四年入営全三十七八年／戦役^ニ於テ^ニ東鶏冠山^ニ於テ^ニ戦死ス行年二十五才

とある。一戸と東鶏冠山には旅順要塞の堡壘があり、ともに第 3 次総攻撃の対象となった激戦地である。第二次大戦後に刊行された『歩兵第四十三聯隊』によれば 11 月 26 日から 12 月 6 日までに 286 名の死者、204 名の負傷者が出たという。その多くは総攻撃初日の 11 月 26 日に集中している⁽⁵⁾。最初の例に掲げた兵士もまたこの日の攻撃で戦死した。なお同書には不完全ながらこの攻撃での戦死者の名前が列挙されている。

幾つかの墓碑銘を見ていく中で、ある特徴的な地名が刻まれていることが分かった。同じく B 寺のある墓石には次のような銘文が刻まれている。

「明治三十七年七月四日征露従軍／清国盛京省劍山東麓ニ於テ奮／闘ノ上戦死行年二十有五歳」

旅順総攻撃の前、攻略戦の準備段階の 7 月 4 日に旅順東方に位置する劍山というところで兵士は戦死した。この劍山が本稿の考察の端緒となる。

旅順の東方の劍山は正しくは「けんざん」と読むが、当時の徳島の新聞は同県の慣用に従い「つるぎさん」とルビを振ることもある。この名称は中国由来のものではなく、現地の人はもともとこの山を老横山と呼んでいた。標高は 368 メートルで周りの丘陵よりやや高く眺望がよく観測点に適している。大連から旅順方面に向かう交通路を抑える上で戦略的価値を有している為ロシア軍はここに陣地を構築し、日本軍はその奪取を目指した。その時点での名称は老横山でもなく、標高に因む無名の“368 高地”であった。この高地をめぐる戦いについては参謀本部編『明治卅七八年日露戦史』に詳しい⁽⁶⁾。1904 年 6 月 26 日に主として徳島の第 43 聯隊が主力となり同高地を占領、この後ロシア軍が奪還を図るが 7 月 4 日にこれを撃退した。先に紹介した兵士もこのロシア軍の反撃を退けた際に落命したと考えられる。

さて同『明治卅七八年日露戦史』の割注によれば、

「歪頭山ノ西方約一里本称ヲ老横山ト云ヒ其形我四国の劍山ニ酷肖セルニ因リ占領後軍司令官之ヲ劍山ト命名セリ」

とある⁽⁷⁾。該高地の攻略において第 11 師団の貢献が大であるとして、その形状が四国の剣山に似ていることから、名を剣山と改めたという。これが剣山の由来とされる。

剣山命名に関するこの戦史の記述は簡略にすぎようである。1936 年に発行された辻権作「剣山の桜花」は命名の経緯をこれよりも詳細に記している。辻権作は日露戦争当時は第 43 聯隊の第 9 中隊の歩兵少尉として剣山の戦いに参加した。彼はその後 1931 年 8 月より 2 年間歩兵第 43 聯隊の聯隊長を務めているので、その証言は信頼性が高いと考えてよいだろう。

「徳島健児を以てなる我四三聯隊日露戦争の初陣に於て頑強に固守する敵を撃退して之を占領し攻囲作戦の進捗に与へし功績著大なりとし、時の軍司令官乃木大将より永く聯隊の名誉を表彰するため此の高地を徳島の名山に因み剣山と命名せられたり。

次に小孤山戦闘に於て頑強沈毅の敵に数回の不屈不撓勇猛果敢の攻撃を加へて目出度之を占領して茲に武勲赫々たる偉功の二重奏をなせり。之に依つて軍司令官よりの感状を賜ふ。

感 状

歩兵第四十三聯隊

明治三十七年六月廿六日ノ戦闘ニ於テ、剣山ヲ攻略シ爾來屢々敵襲ニ対シテ之を固守シ八月七日同九日ニ亘ル小孤山ノ攻撃ニ際シテ敵火ヲ冒シ峻崖ヲ攀ジ損害ヲ蒙ルモ更ニ屈セズ遂ニ同山ヲ占領セリ爾來屢々敵艦隊ノ猛射ニ耐ヘ數回ノ逆襲ヲ掃攘シ敵ヲシテ全ク旅順要塞内ニ退却セシメタリ。

明治三十八年五月二十二日

第三軍司令官男爵 乃木希典⁽⁸⁾

この 1904 年 6 月 26 日の剣山の占領とその防衛は第 43 聯隊の日露戦争における初陣であった。同高地の攻略に同聯隊が重要な役割を果たしたとして、その功を称え徳島県の剣山に因んで命名したという。その後第 43 聯隊は旅順要塞手前の小孤山を多くの戦死傷者を出しつつ占領し、1905 年 5 月 22 日に乃木大将より同聯隊に対して感状が発せられた。

この剣山命名の日時については 7 月 1 日以前のことである。同じく 1936 年に出された「三十一年前剣山攻撃の概要及感想」は、剣山の戦いに参加した伊丹喜和次の談を記者の一宮松二が聞き取りまとめたものである。“31 年前”とあることから、取材自体は 1935 年に行われたと思われる。その中に、

「六月二十九日 軍司令官より三六八高地を剣山と命名する旨の通知あり。」⁽⁹⁾

というくだりがある。また戦いより約 1 ヶ月半後の 8 月 12 日に出た『徳島日日新報』の記事「阿波の勇士」には、

「二十八日新占領地を剣山と命名したるは普く人の知る処にして阿波国の名誉と言ふべし」⁽¹⁰⁾

と記される。第三軍司令部は 7 月 1 日に大本營に剣山命名の報告を發出した。

「明治三十七年七月一日 第三軍司令部 大本營御中 安子嶺東南約四千米独立標高 368 ノ山（六月廿六日ノ戦闘ニ占領シタルモノ）ヲ当軍ニ於テハ爾後剣山ト称呼スルルト相成候。」⁽¹¹⁾

以上を踏まえれば剣山を占領した 6 月 26 日の後、ロシア軍の反撃を受けるまでの 6 月 28 日～

30日に第三軍司令部内で命名、決定されたとするのが妥当だろう。

なおこの命名の由来には様々な俗説が附されるようになる。一例を挙げると1937年刊行の木村毅『乃木將軍』という通俗小説には臨場感ある筆致で事の顛末が語られる。

「乃木將軍が手塩にかけて育てあげた四国出の兵隊は、さすが期待に背かず、劍山の占領に赫々たる偉勲を立てたのである。……攻撃は歩兵第四十三聯隊に命じて、六月二十六日の午後零時四十分から着手させた。……午後の五時になると、恰も大波の引くように、敵は潰走を初（※始）めて、さしもの嶮要が完全にわが有に帰した。

……

『……新しい名が付くのなら、あれは四十三山と呼ばして貰へないか、あれを占領したのは四国四十三聯隊だから、と聯隊長（西山保之大佐）から、師団長まで申し出てあるさうです。』

……

『然しそれも少し曲がなさ過ぎるな。第一、その四十三を、いつまでも、それを占領した聯隊の番号だと人が思へばいいが、時が立つ中には標高と間違はれはせんか。山を数字で呼ぶのは大抵標高だらう。』

……

『それには劍山と名づけたら何うだらうな。』

……。

『あんたは知らぬだらうが、あの四十三聯隊の兵舎の裏に劍山と云ふのがある。劍山のケンはそのつるぎだ。』

……

かくして無名山の新名称は劍山！ しかもそれは此れを占領した聯隊将士の名誉を千載に伝えるために、特に乃木將軍がこの名を選ばれたのだと聞いて、名将の心使ひはさすがに違ったものだと、西山聯隊長は今更のやうに感嘆を久しうした。」⁽¹²⁾

乃木希典の台詞として「兵舎の裏に劍山」とあるが、この時点での第43聯隊は善通寺にあって近辺に劍山はない。徳島の劍山の麓にも聯隊の駐屯地はない。この文章は想像を交えた創作であるが、命名の由来は兎も角として、戦前期日本では四国以外の人びともまた旅順攻略戦の前哨戦としての「劍山の戦い」を認知していたことを示している。

II 県人の見た劍山：戦局の推移

『徳島日日新報』は開戦後より県人出身兵士の手紙や談話を掲載している。第11師団が塩大澳に上陸した5月28日の後に彼らに関する記事は増えていく。6月17日、26日などの紙面には「本県出身勇士の便り」と題し、戦死者が生前に故郷に送った手紙が掲載された。17日の記事の評語に記者は次のように述べる。

「記者曰、嗚呼是れ氏が最後の絶筆、書中今より敵中に這入可致との語は氏が騎兵として斥候任務に当る可き覚悟を示したる者にして、氏は又実に一隊中より選抜の榮を負ひ、第

一に特別なる偵察任務に就き先登名誉の戦死を遂げたる者なり、何等の悲絶壯絶ぞ。」⁽¹³⁾
この時点、まだ徳島では戦死者自体がそれほど目立たなかった為に、県出身兵士の名誉の戦死を大々的に称える論調が目立つが、一方同じ頃徐々に戦病死についての事務取扱の記事も散見されるようになった。例えば『徳島日日新報』1904年7月13日の「戦病死傷者通知に就て」「戦病死負傷者速報」という記事がそれである。この後に見るように戦闘が苛烈さを増すにつれて遺骨引き取り、慰霊といった行事の記事が増加するようになる。

では第43聯隊による剣山の占領と防衛が徳島県の人びとに広く知られるようになるのは何時か。旅順の戦況は日本軍の発表、外国の通信社によって速報として国内に伝えられた。興味深いところでは旅順の対岸の山東半島芝罘から電文で寄せられる情報も2～3日で徳島の新聞に掲載されている。剣山は6月26日に占領され、7月2日から4日にかけてロシア軍の反攻が却けられた。おそらく7月上旬に徳島に伝わった可能性があるが、残念ながら1904年7月の『徳島日日新報』の残存状況は良くないために確認できない。管見の限り7月2日付けで発送された手紙が24日の『徳島日日新報』に掲載されたのが、剣山占領を報ずる最初の詳報である。以下はその「金鵝勲章(上)」と題した記事である。

「決死の斥候——剣山の先登陸軍歩兵上等兵〇〇〇〇氏 麻植郡山瀬村大字瀬詰村出身
陸軍歩兵上等兵〇〇〇〇氏は選抜決死斥候として万死を冒し剣山先登の大名譽を現はし
軍司令官より感状を与へられたる勇士なり。アア氏現に感状を受く金鵝勲章の胸間に輝く
は必然にして亦た疑ふべからず。七月二日附を以て氏が父竹造氏に送り、左の書簡は氏が
本懐を叙したるもの。(下略)」⁽¹⁴⁾

同日の紙面には「偉大の功績」、続く7月27日には「金鵝勲章(下)」「剣山の夜襲(上)」、
28日には「同(下)」、30日には「阿波の勇士」、8月2日「某聯隊初陣の功名」、8月12日
「阿波の勇士」とそれぞれタイトルを附した記事が剣山攻略とそれに参加した県人兵士の体験
を記している。7月30日の「本県出身名誉の戦死者」は剣山付近の戦闘にて戦死した県人兵士
について報じている。このように7月下旬から8月上旬にかけて徳島の人びとは剣山の戦いにつ
いて情報を得るようになったと考えられる。

8月2日には「第十一師団長の謝状」という記事が載った。

「床次知事は土屋第十一師団長に対し〇〇を占領して之を剣山と命名したる快報に接す
るや直ちに祝電を發し置きたるところ今回鄭重なる謝状を送り歸されたり。」⁽¹⁵⁾

この〇〇は「剣山」あるいは「無名の368高地」を指す。県もまたこの占領と剣山の命名を名
譽のこととして祝電を發した。それに対して第11師団から感謝状が届いたということである。
この後、8月を通して『徳島日日新報』の紙面は剣山の戦いを称えると同時に旅順攻略を楽観視
する傾向が続く。

しかし周知の通り8月19日に始まる第1次総攻撃は、多大な犠牲を払って失敗した。それが
県内に伝わるのは8月下旬のことであろう。この前後、旅順の陥落時期に対して人びとは大き
な関心を寄せていた。8月27日の「旅順陥落期」記事は23日の情報を基に、

「全く防御線を破りて市街を占領するは早くも廿五日なるべく最後の復廓を陥れて旅順
陥落に至るは二十七日ならんと」⁽¹⁶⁾

と予想していた。後生の私たちは8月24日に第1次総攻撃が頓挫したことを知っている。この記事は楽観的な見通しを立てているが、一方上の記事の4日前、23日の記事「旅順陥落談に就て」では軍関係者の談として、

「……兎に角近日陥落すれば結構此上もなき事なるが假令へ二三ヶ月の後に遅延すればとて余は決して之を怪しまざるなり」⁽¹⁷⁾

と早期陥落を見込む姿勢に警鐘を鳴らしている。剣山の戦いを含め、旅順要塞の足下に到達するまでにも日本軍は出血を強いられていた。このように慎重論と楽観論が共に見られるのが8月下旬の紙面の特徴である。

第1次総攻撃失敗の報が郷里に届いたのであろう。9月に入ると楽観的な記事はもはや見られない。依然として県人兵士の活躍を伝える記事は掲載されるが、その文面には旅順攻略戦の苦闘が反映されるようになる。9月1日の「鉄條網の破壊」は勇ましい文体で表される。しかし、

「ウハーウハーの呐喊声と共に進むこと殆んど十米突計りの間に於てバタバタと殞れるもの殞れて後ち転々落来るもの幾十なるを知らず」⁽¹⁸⁾

と、県人兵士の活躍を“斯く戦えり”と称える内容であったとしても、その端々からは第1次総攻撃の様相を垣間見ることができる。

また『徳島日日新報』の紙面全体としては“勝ち戦”が続く遼東半島中部の戦いの記事の比重が高くなっていく。進捗の見られない旅順については剣山をめぐる記事のような一種高揚した雰囲気は見られない。そして9月4日「傷病者慰問と寄贈金品」、9月9日「傷病者の慰問」、9月14日「遺骨遺髪を受取方」というように戦死傷者への対応が地域社会の課題となりつつあり、人びとはここに決して容易ならざる事態を感じ取っていたのである。

戦況について公表が憚られたのか、人びとが旅順で続く戦闘の全容を知るのは1905年1月1日の旅順陥落後のことであった。

Ⅲ 昭和前期「剣山記念塔」の建設と顕彰

日露戦争の後、第1次大戦（日独戦争）とシベリア出兵（干涉戦争）はあったものの、国家の存亡を賭けるような大規模な動員は行われなかった。大正年間を通じて日露戦争の記憶は次第に薄れ、徳島の人びとも教科書に掲載される「広瀬中佐」、著名な「203高地」「東鶏冠山」「奉天会戦」「日本海海戦」はともかくとして、「剣山」のような前座の戦いについてはほぼ忘却しつつあった。だが大正から昭和へと変わる頃、この日露戦争の記憶は再び呼び覚まされるようになる。やや後の昭和9年（1934年）6月28日『徳島毎日新聞』に掲載された「剣山占領記念日 遙拝祭典」は、剣山が占領された6月26日を記念する式典が毎年開催されていたことを伝えている。

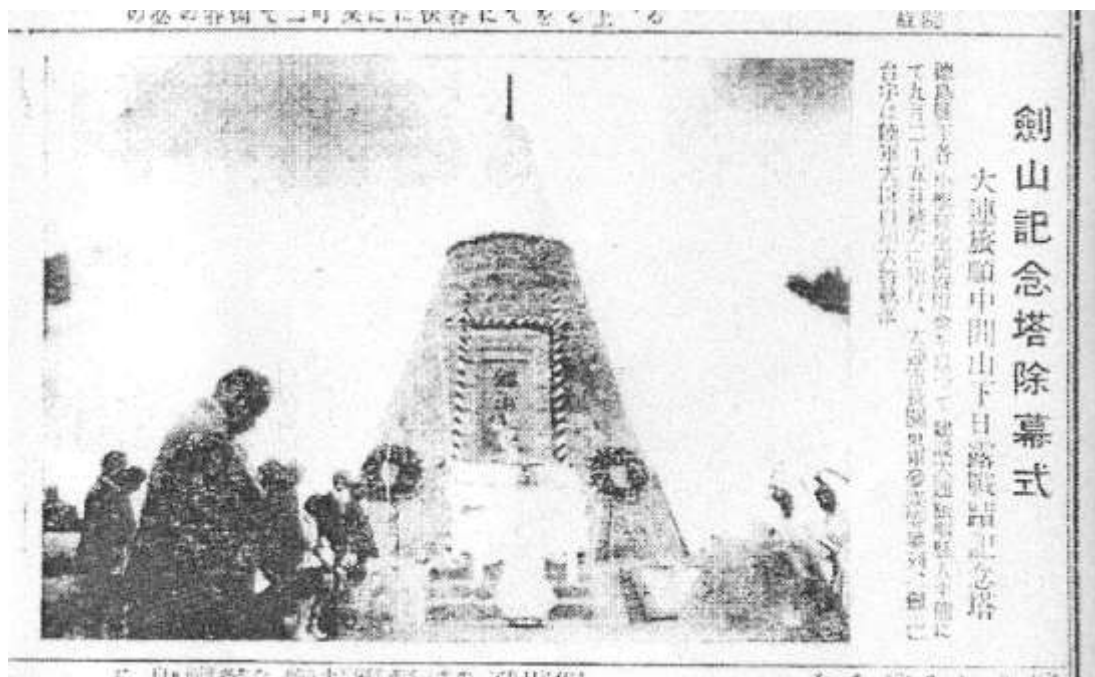
「徳島市戦友会主催のもとに眉山頂剣山本宮遙拝所に於て六月二十六日午前八時より第十回剣山占領記念遙拝祭典を執行……新町公民学校百十名を筆頭に数千の登山者を見た。」⁽¹⁹⁾

市内の眉山山頂の遙拝祭典に主催者発表で数千人が参加し剣山を遙拝したという。この剣山本宮遙拝所とは現在眉山山頂に鎮座する剣山神社（別格剣山本宮）のことであり、大正4年（1915年）に創設された。本来徳島の剣山（つるぎさん）を崇める修験道山岳信仰に基づくものであり、旅順の剣山（けんざん）とは直接の関わりはない⁽²⁰⁾。ここに“第10回”とあることから、1925年（大正14年）から開催されるようになったと考えられる。この昭和が始まるころには「郷土の先輩」を称え人びとの意識を高めるべく、県内各地で「忠魂碑」の建設が進められていたことが、当時の紙面からも読み取れる。

この気運の下、1904年6月26日の剣山の戦いにおける第43聯隊の功績を記念するために徳島県ならびに在満洲の徳島県人会の双方が発起し剣山記念塔の建設が計画され、1927年9月25日にその除幕式が開かれた。その2日後の27日『徳島毎日新聞』の1面の「大連に於ける剣山記念塔除幕式」という記事が当日の様子を速報した。

「【廿五日大連電報】大連県人会及県有志によって建設された剣山記念塔除幕式及慰霊祭は予定通り終了 派遣軍参謀長外名士多数参列盛大を極めた。」⁽²¹⁾

さらにその続報として3日後の9月30日の記事「剣山記念塔除幕式 大連旅順中間山下日露戦蹟記念塔」が写真付きで次のように報じた。



「徳島県下各小学校生徒寄付金を以て建設大連旅順県人会主催にて九月二十五日盛大に
 挙行、大連市長関東軍参謀等参列、「剣山」台字は陸軍大臣白川大将執筆」⁽²²⁾



この記念塔の中程に白川義則揮毫による「剣山」と題した碑が埋め込まれている。記事では陸軍大臣とあるが関東軍司令官の誤りである。記念塔自体は戦後しばらくは残存していたが、文化大革命（1966年～1976年）の時に破壊されてしまった。この碑石のみ現在旅順市内の「日露監獄旧址博物館」（日露監獄旧跡博物館）に収蔵、展示されている。博物館収蔵の「剣山」の字の下には銘文が刻まれるが、現在その字は光線の関係上判読しがたい（左図）。だがその拓本が1936年刊行の『郷土阿波』誌に図版として掲載されているので（右図）、これによりその全文を知ることができる⁽²³⁾。



本 拓ノ塔山剣
(拓氏明徳本山市建大)
(蔵所山剣田福)

「明治三十七年六月二十六日第十一師団歩兵第四十三聯隊ハ此ノ山ヲ占領シ爾後数回恢復ヲ図ル敵ノ猛襲ヲ受ケシモ毎ニ之ヲ撃退シテ其ノ領有ヲ全ウセリ
第三軍司令官乃木大将ハ其ノ功績ヲ表彰スル為メ該聯隊壯丁ノ出身地タル阿波ノ名山ニ因ミ特ニ剣山ト名付ケラレタルモノナリ
大正十五年六月

陸軍大将白川義則誌

この銘文は剣山命名の由来を述べ、第43聯隊の功績を顕彰するものであった。

拓本を掲載する『郷土阿波』第2巻第5号は「剣山記念号」と題して剣山の戦いの回顧文を掲載し、今後の活動のさらなる展開を呼びかけている。前節で引用した辻権作「剣山の桜花」、伊丹喜和次・一宮松二執筆の「三十一年前剣山攻撃の概要及感想」も同誌に収録されている。同じく所収の黒田周一「剣山塔と剣山会に就て」は記念塔の建設の由来に詳しい。氏は日露戦争時には第43聯隊の第7中隊の小隊長を務めていた。その後、1923年に関東軍高級参謀に転

補、旅順に赴任した。第 11 師団が攻略に尽力し多くの犠牲を払った望台砲台から剣山を望み、人びとに解説するに際して目印のないのに困り、「記念塔を建設し阿波先輩の忠魂の集まり給ふ霊地とせねばならぬ」と考え記念塔の建設を発起したという。

「旅順戦蹟保存会に記念塔建設方交渉中に徳島県人の寄附を以て建てた方が意義があると言ふ動議も出て義金を募り建設する事になり大連在住の山本、佐藤両氏必死の努力を払い、徳島地方では西野、越智氏等の不一方ざる尽力に依り幾度かの難関を経て徳島県有志諸彦や可憐の小学生の一銭寄附が積もり積つて何千円となり昭和二年六月二十六日起工し同年九月二十五日剣山の頂上に美事なる大記念塔が完成した次第であります。

御蔭にて忠魂集座の霊塔が出来ましたのみならず旅順より遙かに眺望して剣山の好目標となりました。其塔の題字は時の関東軍司令官白川大将に御依頼致しまして眼前で御揮毫を得たものであります。」⁽²⁴⁾

このように郷土の先輩の偉業を思い出し慰霊することを目的として大連旅順の県人会と徳島県側の双方の協力により建設事業が進められたのである。その詳細は『徳島毎日新聞』1927 年 4 月 23 日の記事「阿波健児の偉勲を記念する剣山の記念塔」からも窺い知ることができる。やや長い記事であるが徳島側の取り組みが分かるので全文を引用する。

「国を賭て生死の分岐点に立った明治三十七八年戦役に於て戦史未曾有の激戦と記さる乃木第三軍の肉弾を以て当りし旅順攻撃二年に亘る間、最も高価なる犠牲を払ひ而して此事ありしに依って遠も難攻とし不落とされし旅順の要塞を陥落するの重大原因を齎した旅順連峰の峻嶺に幾多将卒の生命を積むで三十七年六月廿六日払暁日章旗高く翻せし者第十一師団歩兵第四十三聯隊阿波国健児であった。師将乃木將軍はいたく感激して阿波国健児の奮闘偉勲を永久に記念せむと之れに阿波名山を冠して『剣山』と命名した。茲に春秋二十有余年、旅順大連在住の徳島県人相計りて尊き戦士の英霊を追慕し其戦功を記念すべく旅順剣山の絶嶺に一大記念塔を建設する計画久しきものがあつたが此際愈々実行に着手することとなり今度内地県人の諒解と援助を得る為めに代表者となつて、佐藤織之助氏が帰県した、に就て県当局に於ても此の壮挙に対し出来得る限りの援助を惜まざるべしと快諾する所あり。又当時四十三聯隊の青年将校として剣山占領に奮戦した現第四十三聯隊司令官越智大佐及同大佐の戦友として旅順攻略に参画した二等主計西野嘉右衛門氏其他に於て最善を尽す事となつたので工費三千元と云えば発起人の間に於ても取纏め得られることであるが県七十万民衆から多数の援助を得るを本志として一般人の醸金の外県下各中等学校生徒初等学校児童を中心に一人一銭宛の醸金を募集して醸金者の団体名又は氏名を銘記し記念塔内に納める筈である。醸金締切りは五月五日限り醸金は便宜の方法にて小松島市西野嘉右衛門氏宛送付されたしと、県民諸彦挙つて賛同されたきものである。発起人左の如し。(大連旅順の徳島県人 20 名の所属と氏名 黒田周一を筆頭とする)」

(25)

徳島では西野嘉右衛門が中心となつて同年 5 月 5 日を期限に募金活動が行われた。文中にあるとおり「工費三千元と云えば発起人の間に於ても取纏め得られることであるが」、多くの人の中で事業について周知を図ることが主な目的であつたと考えられる。それ故、小中学校生徒

からは「一人一銭」という少額の寄付を求めるなど幅広い運動が展開された。その後、1927年6月26日という剣山攻略の23周年の日に起工、9月25日に除幕式を行った。その情景は先に紹介した『徳島毎日新聞』の記事に記されている。

この運動の旅順・大連側の代表が先の『郷土阿波』に寄稿した黒田周一、剣山会の会長である。この剣山会は1931年6月26日に規約を制定しているの、この日に結成されたと考えられる。日露戦後25年以上が経過しており、ここで剣山会規約第1条に「日露戦争を回想し忠魂を慰め」とあるように、徳島県人と旅順攻略戦の関係を再確認しつつ顕彰と慰霊を行うこととした⁽²⁶⁾。

「此占領に依り前述の如く乃木將軍より表彰せられるに至ったのでありますから此占領は即ち六月二十六日を記念日と定めた次第であります。苟も阿波に生を享けられたる方々は老幼、男女の別なく阿波記念日であると言ふ考へを以て年中行事の一つとして是非共慰霊修養の催しをして戴きたいのであります。」⁽²⁷⁾

現地では占領の日の6月26日を“阿波記念日”として慰霊の催しを実施するという。

この後、旅順の剣山記念塔が建設されて約10年後、昭和10年代(1935年～)にかけて徳島では毎年6月26日に剣山占領記念日の式典が開かれた。本稿第Ⅲ節冒頭で紹介した「剣山占領記念日 遙拝祭典」『徳島毎日新聞』1934年6月28日は県戦友会主催の式典を伝える典型的な記事である。各地の戦友会もまたこの時期になると記念講演会や懇談会などの催しを企画した⁽²⁸⁾。例えば1935年6月28日にも小松島の老兵会の活動を伝える記事が載っている。

「六月二十六日……(小松島老兵会の)老兵達百五十余名の会員は……日峯山頂剣山遙拝所に登山、一同皇室を遙拝し剣山に向かって……黙禱遙拝。」⁽²⁹⁾

この小松島市日峯山の剣山遙拝所は1925年9月に建立された。正式には剣山本宮遙拝所と称し旅順の剣山ではなく徳島県の剣山の方角を向いて建てられている⁽³⁰⁾。ここでも徳島市の眉山山頂の剣山神社と同様、剣山に対する山岳信仰を下敷きに1904年の剣山の祀りが執り行われていた点が興味深い。

この翌年、1936年には前述の通り『郷土阿波』誌が関連する諸論考を収録した「剣山記念号」を発行し、郷土の先輩の誇るべき事績として「剣山(けんざん)」が広く県民に紹介された。ただし戦後30年が経過したこの頃、一部では細かな事実が忘れられていたことも興味深い事実である。『徳島毎日新聞』1936年6月18日掲載の記事「東鷄冠山陥落記念日 廿六日戦友会が眉山へ登頂」という標題の“東鷄冠山”は、当時の日本人に特によく知られた旅順要塞の激戦地の一つである。203高地と並んで戦跡の代表格であったので、おそらく記者が混同したのであろう。祭典翌日の新聞は「剣山の記念日」として正しい名称で式の様子を伝えていた⁽³¹⁾。

続く1937年もまた6月26日の剣山記念日に眉山山頂で徳島戦友会が式典を開き、会員50余名の他、徳島高等女学の生徒がこれに参列した⁽³²⁾。当日朝の紙面には「思ひ出す けふ廿六日の記念日 阿州健児が肉弾で殊勲を樹立した剣山」という七段組の記事が生まれ、当時戦いに参加した兵士の長文の回想文が掲載された。さらに同日、清水良策県知事を会長とする剣山顕彰総会が県参議会にて開催された⁽³³⁾。徳島の剣山山頂にヒュッテ(山小屋)や案内板を建設・設置するとともに、

「記念碑建設（剣山々頂へ石碑を建立、銅板を挿入して日露役と剣山及び阿波山嶽武士の由来を記入）」⁽³⁴⁾

という事業計画を承認した。旅順の「剣山記念塔」のみならず徳島にも「剣山記念碑」を建設しようという動きが盛り上がりつつあった。ただしここで建設を承認された剣山山頂の「剣山記念碑」が実際に建設されたのか、建設されたとして現存しているかどうかは現時点では未確認である。大方のご教示を乞いたい。

この時点で日中関係が破綻することを予期していた者はごく少数であろう。約10日後の7月7日盧溝橋事件を直接の契機として日中の対立は決定的になり、全面戦争へと突入した。四国の第11師団は上海派遣軍の隷下に入り8月以降戦地へと向かった。本稿第I節で述べたように、この時期以降に亡くなった兵士の墓石は、それまでの戦死者のそれに比べて多数を占めるようになる。翌年にかけて『徳島毎日新聞』の紙面には戦死者の慰霊、村葬の記事が頻繁に掲載され、徳島の地域社会が次第に戦争に巻き込まれていった様子がうかがい知れる。剣山の記念日も毎年継続して行われ、日露戦争の記憶を媒介とした戦意高揚が図られた⁽³⁵⁾。

おわりに

戦争に至るまでの時期、市井の人びとが東アジアとどのように関わっていたかという記憶は近年急速に消滅しつつある。庶民が戦争によって苦しんだというのも事実ではあるが、少なくとも敗戦前の日本では軍隊はそこにある日常の一つであり、人びとがそれと共存し、更には直接的・間接的に戦争に加担したという事実もまた否定できない⁽³⁶⁾。

筆者の作業の目的は一つの地域社会の視点から19世紀後半から20世紀前半の人びとが東アジアでの活動の場を広げていく過程を辿ることにある。それは日本の対外拡張、進出と侵略と無関係ではあり得ない。ここで取り上げた満洲の“剣山”はまさに日本の戦争の中で出現し、当時の人びとの中で一定の認知を得ていたものである。本稿の第III節で見た剣山の顕彰が目指すところは単なる郷土の先輩の称揚であったのではない。この一連の事業に携わった人びとにより当時の国際情勢の緊張が述べられている点が興味深い。以下、1936年6月1日に黒田周一によって執筆された「剣山会趣旨書」には同会結成の精神が語られる。

「曩ニ「ワシントン」條約破棄通告発セラレ本年一月十六日「ロンドン」軍縮會議ヲ脱退シ満蘇ノ国境風雲穩カナラザルモノアルノミナラズ国内情勢亦戒心ヲ要スルモノアリテ帝国内外ノ現勢ハ真ニ挙国振張ノ秋トナリマシタ。此秋ニ方日露戦争ヲ懷想シテ心身ヲ修練シ純日本精神ニ甦エリ協力一致以テ国力拡充ノ基イフ堅フスルハ蓋シ刻下ノ急務デアルト思ヒマス。……

恭シク按ズルニ在満ノ我等先輩ノ忠魂英靈必ズヤ本塔上ニ集座マスコトト拝察致シマス。茲ニ於テ此ノ意義深キ我等ノ剣山ノ由来ヲ本会ノ精神トシ之ヲ会名ニ冠シ以テ左記規約ニ基キ本趣意ノ貫徹実現ヲ図ルハ則チ後進県人ノ徳義ニシテ忠魂ヲ慰メ時局ニ善処シ聖旨ニ副ヒ奉ル所以デアルト信ジマス。」⁽³⁷⁾

ここに記される「挙国振張ノ秋」とは、この3年前の1933年3月27日に発せられた「国際聯

盟脱退ノ詔書」の「方今列国ハ稀有ノ政変ニ際シ帝国亦非常ノ時艱ニ遭遇ス是レ正ニ挙国振張ノ秋ナリ」という部分を踏まえたものであろう。国際的に孤立を深めていく昭和前期の日本において、人びとの結束と動員を強化する雰囲気醸成されつつあった。その中で日露戦争の記憶は人びとを結集し満洲へと結びつける表象としての役目を担うようになった。戦死者の慰霊と県人の親睦をはかる為だけに剣山記念塔と剣山会はあったのではない。この昭和前期日本の世相を反映し、人びとは満洲と徳島を結ぶ橋梁となる「剣山（けんざん）」を再び思い出した。

そして1945年の日本の敗戦によって旅順の剣山は姿を消すこととなった。剣山はもとより支配者が勝手に命名したものであり、現地の人びとの認知する名称ではない。日本がこの地より退くことにより、その名前は「横山」にもどった。私たちがまた剣山と言えば、「つるぎさん」と訓じるのが普通となり、「けんざん」を忘れたのである。

附記：現在の剣山ならびに関連施設について（2019年10月）

剣山（けんざん）は今どうなっているのか。以下、附記として旅順近郊の剣山及びその山上に安置されていた「剣山碑」が収蔵・展示されている「日露監獄旧址博物館」（日露監獄旧跡博物館）へのアクセスについて紹介する。すべて2019年10月の情報による。



上図 剣山攻撃



右図 現在の横山寺と横山（2019年10月）

剣山は現在、横山 Hengshan（ホンシャン）と称される。横山寺を目指すとその山の中腹まで行くことができる。横山寺のすぐ裏手の山峰が横山すなわち剣山である（右図）。日露戦争時の痕跡は全くないが、絵画「剣山攻撃」（左図）と対照すれば特徴的な3つの嶺が確認される⁽³⁸⁾。絵は南側、後述する龍王塘の方角から構図をとっている。現在、龍王塘から横山寺へは画中の河川右側の岸に沿った道路を進む。

旅順戦跡の探訪は大連市が起点となる。公共交通機関で行く場合、大連火車站（大連駅）の

北出口、広場の反対側の青泥街と興業街の交差点の近く、韓国服装城の南 1 門のそばの停留所からバスに乗る。中国の検索サイト“百度 baidu”の地図のアプリやサイトでは路線や時刻表、経路の検索が可能であり、「横山寺」と入力すれば目的地までのルート案が表示される。直通バスは「2002 路横山寺加班車」、つまり横山寺行き臨時便であり、毎日 6:40、10:00、14:00 発であるとわかる。運賃は前払いで 5 元、両替はできないのであらかじめ小銭の用意が必要である。10 分ごとに頻発するのは旅順市行きのバス 2002 路である。大連から旅順に行くには乗り換える必要がないので後述する轻轨（ライトレール）よりも便利である。横山寺広場まで所要 1 時間 40 分、帰りは 8:20、12:40、15:40 発、ただし土日は横山寺の入り口（終点広場から路を下って 30 分）が出发点になるので注意を要する。

バスに乗らないのであれば最寄り駅の轻轨 12 号線の龍王塘駅から徒歩で往復する必要がある。横山寺行きのバスも駅前を通過するがその時刻は交通状況によるので定まっていない。横山寺広場まで片道約 7.3 キロメートルである。道は単純だが百度地図などを利用すると迷うことがない。

横山寺は横山の中腹にあり、境内からは横山の全貌を見る事が出来る。この山頂にかつて「劍山記念塔」が建てられていたが文化大革命の時に破壊されたという。本文中で述べたようにこの記念塔に埋め込まれた碑石は旅順市街の「日俄監獄旧址博物館」（日露監獄旧跡博物館）に「劍山碑」として収蔵された。

大連から旅順へはバスで直接向かうか、あるいは地下鉄と轻轨を乗り継いで行かねばならない。バスは旅順市街中心の旅順バスターミナル（汽車站）が終点であり、そこから各方面へ市内バスが出ている。轻轨の旅順駅は市街の北側に位置しておりやや交通に不便である。横山（劍山）から旅順に行くならば、一旦最寄りの龍王塘の駅まで徒歩或いはバスで降りてこなければならない。そこから旅順方面の轻轨か 2002 路のバスに乗り旅順に向かう。轻轨の場合、塔河湾の駅を過ぎると次は旅順駅である。西へと進んできた列車はやがて右に曲がり二つの丘陵地帯の間のやや広い平原を北西に進む。ここが旅順要塞攻略戦の正面の主戦場、まずは第 11 師団の担当区域である。右に小孤山を見、左に東鷄冠山などの堡壘群のあった丘陵をみる。ちょうど日本軍の塹壕線に沿うように轻轨は進んでいく。当時樹木は伐採され見通しを遮るものはなかったが、今は灌木の茂る平原で、要塞だった丘陵には木々が戦跡を覆い隠している。右図は東鷄冠山の麓から小孤山を望んでいる。画面左のビルの後ろ側に轻轨の高架が走っている。



図 東鷄冠山山麓より小孤山

む。ここが旅順要塞攻略戦の正面の主戦場、まずは第 11 師団の担当区域である。右に小孤山を見、左に東鷄冠山などの堡壘群のあった丘陵をみる。ちょうど日本軍の塹壕線に沿うように轻轨は進んでいく。当時樹木は伐採され見通しを遮るものはなかったが、今は灌木の茂る平原で、要塞だった丘陵には木々が戦跡を覆い隠している。右図は東鷄冠山の麓から小孤山を望んでいる。画面左のビルの後ろ側に轻轨の高架が走っている。

第 11 師団担当区域を抜け第 9 師団の担当区域に入ると再びレールは西進し旅順駅に到着する。これより鉄道は 203 高地の南麓を通って旅順新港まで至る。旅順の市街地は旅順駅から南に進んだところにある。市街中心部には旧旅順駅がありロシア風のたたずまいを今に残している。軽軌の旅順駅からは 10 路のバスで行くことができる。大連から龍王塘を通る 2002 路のバスは、塔河湾からそのまま海沿いを直進して旅順バスターミナルへと向かうので、以上の戦跡は通らない。

日露監獄旧跡博物館は軽軌の旅順駅からは 7 路、203 路、204 路に乗って「元宝坊」で下車するとよい。市内のバスは料金 1 元か 2 元である。乗車時に 1 元を払い、必要であれば下車時にもう 1 元要求される二段階方式である。博物館から市街の見所までは徒歩圏である。203 高地や東鶏冠山北堡壘跡、望山砲台、水師營を見学するならば体力と時間が必要とされるので、タクシーの利用が望ましい。旅順駅にはタクシーの客引きがおり、相場より高めではあるがチャーターが可能である。また町中を走るタクシーも多いが、後述する東鶏冠山、望山砲台、203 高地などではほぼ拾うことはできない。



左図 望山砲台跡



右図 東鶏冠山北堡壘跡

徒歩の場合、博物館から東鶏冠山北堡壘は 2 時間弱の行程である。博物館の南東角の元宝街を通って山を登っていけば望山と東鶏冠山まで行くことができる。道はアスファルトで舗装され歩くのに困難はない。東鶏冠山北堡壘は旅順攻略戦の激戦地の一つであり、かつての様子がそのまま残る戦跡である。そこから北北東へなだらかな坂を下り軽軌の高架をくぐり、新城大街の交差点を左へ（つまり北西へ）歩けば「飛馬家具」のバス停がある（徒歩所要 20 分）。この辺りはかつて塹壕と鉄条網が張り巡らされ日露両軍が対峙した所であり、多くの人命が失われた。32 路、203 路のバスに乗れば旅順駅へ戻ることができる。

旅順駅から水師營へはバスが頻発している。7 路、10 路、81 路のバスを降り、そのまま直進

し市場の奥、水師営街の突き当たりに「水師営会見所跡」がある。本来は少し離れた場所にあったが、有名な橐の木を含めてこの場所にて再現したものである。係員が満鉄の水晶時計だの、様々な文物を売りつけようとするが、ほぼニセモノであろう。

203 高地は旅順駅からならば 210 路、212 路のバスで「三高中」（第三高級中学）を通るバスが利用可能である。バスを降り春城街をそのまま進行方向へ進み、革新街を右へ曲がり 10 分ほどで 203 景区の入り口に達する。ここからカートに乗れば片道 10 元、歩けば約半時間で山頂広場まで行ける。そこから 203 高地の頂上までは歩いて 5 分程度である。再び入り口に戻り、旅順駅に行くならば先ほどの下車地点の反対側のバス停へ、市街地に行くならば革新路をそのまますすぐ下り、革新路にある「石板橋」「三高中」のバス停から 5 番のバスに乗るとよい。

なお旅順市街・大連市街の町歩き、過去と現況との対比には木之内誠『大連・旅順歴史ガイドマップ』大修館書店、2019 年が有用である。

-
- (1) 徳島大学機関リポジトリで公開。 <https://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/ja>。
 - (2) 近年の動向を代表するものとして、シリーズ『地域のなかの軍隊』（全 9 巻）吉川弘文館、2014～2015 年がある。同シリーズは日本各地の軍隊を地域社会の視点から読み解く論考を収録している。
 - (3) 松尾正人「日露戦争と地域社会：北多摩郡村山地域を中心に」『中央大学文学部紀要 史学』60、2015 年。
 - (4) 小幡尚「高知県中山村の日露戦争戦没者：兵士の動向と地域の対応」『海南史学』57、2019 年、同「高知県中山村と日露戦争：地域の対応と帰還した兵士の動向」『高知人文社会科学研究』7、2020 年。
 - (5) 井上銀晴『歩兵第四十三聯隊 I「創設－上海事変篇」』株式会社出版（徳島）、1971 年、pp.37-44。
 - (6) 参謀本部編『明治卅七八年日露戦史』第 5 巻「旅順要塞ノ攻略」偕行社、1913 年、pp.18-77。
 - (7) 同上、p.18。
 - (8) 辻権作「剣山の桜花」『郷土阿波』第 2 巻第 5 号、1936 年、p.375。
 - (9) 伊丹喜和次「三十一年前剣山攻撃の概要及感想」『郷土阿波』第 2 巻第 5 号、1936 年、p.380。
 - (10) 「阿波の勇士」『徳島日日新報』1904 年 8 月 12 日。
 - (11) 「JACAR (アジア歴史資料センター)Ref.C06040406000、「明治 37 年 7 月－9 月 謀臨書類綴 大本営陸軍参謀」(防衛省防衛研究所)」。
 - (12) 木村毅『乃木将軍』千倉書房、1937 年、pp.147-154。
 - (13) 「本県出身勇士の便り」『徳島日日新報』1904 年 6 月 17 日。
 - (14) 「金鷄勲章（上）」『徳島日日新報』1904 年 7 月 24 日。
 - (15) 「第十一師団長の謝状」『徳島日日新報』1904 年 8 月 2 日。
 - (16) 「旅順陥落期」『徳島日日新報』1904 年 8 月 27 日。
 - (17) 「旅順陥落談に就て」『徳島日日新報』1904 年 8 月 23 日。
 - (18) 「鉄条網の破壊」『徳島日日新報』1904 年 9 月 1 日。
 - (19) 「剣山占領記念日 遙拝祭典」『徳島毎日新聞』1934 年 6 月 28 日。
 - (20) 徳島市眉山山頂「剣山神社」の「由緒」による。

-
- (21) 「大連に於ける剣山記念塔除幕式」『徳島毎日新聞』1927年6月27日。
- (22) 「剣山記念塔除幕式 大連旅順中間山下日露戦蹟記念塔」『徳島毎日新聞』1927年9月30日。
- (23) 「剣山塔ノ拓本」『郷土阿波』第2巻第5号、1936年。
- (24) 黒田周一「剣山塔と剣山会に就て」『郷土阿波』第2巻第5号、1936年、pp.366-367。
- (25) 「阿波健児の偉勲を記念する剣山塔：生徒児童から一人一銭の浄財を募る」『徳島毎日新聞』1927年4月23日。
- (26) 同黒田周一、p.369。
- (27) 同黒田周一、pp.367-368。
- (28) 「徳島戦友会が剣山記念講演」『徳島毎日新聞』1935年6月14日。
- (29) 「剣山命名を偲ぶ 小松島老兵会 廿六日の記念日に咲く懐旧談の花」『徳島毎日新聞』1935年6月28日。
- (30) 小松島市日峯山。日峯大神子広域公園の展望広場、駐車場の側に現存。
- (31) 「東鷄冠山陥落記念日 廿六日戦友会が眉山へ登山」『徳島毎日新聞』1936年6月18日。「剣山の記念日 廿六日戦友会遙拝」『徳島毎日新聞』1936年6月27日。東鷄冠山は第三次総攻撃の1904年12月18日に同山北堡壘の攻略に成功した。
- (32) 「眉山頂で追憶 剣山占領日を迎えた徳島戦友会」『徳島毎日新聞』1937年6月27日。
- (33) 「剣山顕彰会総会 二十六日県庁で開く」『徳島毎日新聞』1937年6月15日。
- (34) 「剣山記念碑 顕彰会で建設決定」『徳島毎日新聞』1937年6月27日。
- (35) 「思ひぞ出づる剣山記念日 小松島老兵達の意気昂る」『徳島毎日新聞』1939年6月27日、「六月二十六日を想起せよ 阿波健児の雄魂を偲べ 剣山占領記念日に県民一斉の行事希望」『徳島毎日新聞』1940年6月4日。
- (36) 吉見義明『草の根のファシズム：日本民衆の戦争体験』東京大学出版会、1987年。
- (37) 前掲黒田周一、p.368。
- (38) 岩村武勇『徳島県歴史写真集』岩村武勇（限定版）、1968年、p.406所収。この「剣山攻撃」という絵画は歩兵第43聯隊旧蔵とされる。この絵画は下絵となる写真があると考えられる。「思ひ出す けふ廿六日の記念日 阿州健児が肉弾で殊勲を樹立した剣山」（『徳島毎日新聞』1937年6月26日）には当時の43連隊長西山保之大佐の肖像とともに剣山の写真が掲載されているが、その構図はこの絵画と同じである。